関西学院大学陸上競技部で部員とともに学んだこと

陸上競技部　北井敏雄（昭和 54 年卒）

KGAA 講座で講演をさせていただいた時点は監督でしたが、2016 年 3 月末日をもって関西学院を退職しており、監督も交代しましたので前監督として標題に即して講演内容に関して記載させていただきます。

１．陸上競技部の歴史

2018 年に創部 100 周年を迎えますが、講演内容は 2014 年に講演させていただいいた時点までの陸上競技部の歴史について大正、昭和（戦前・戦後)、平成と時代ごとに振り返りながら、その時代ごとの隆盛についてパワーポイントを使用して説明を行いました。創部された大正時代は関西では神戸高商（現在の神戸大学）と並び関西の学生陸上界を牽引する部で、今のアジア大会にあたる極東選手権大会に多くの選手を輩出、また日本記録を樹立した方、日本選手権を獲得した方もおられ、部としても関西インカレで総合優勝を果たしています。

年号が昭和になり、ちょうど原田の森から上ケ原にキャンパスが移ってきた時、一時期低迷しました。第二次世界大戦に入る前の昭和 10 年以降は徐々に戦力も充実し、関西インカレで 2 度目の総合優勝、またユニバーシアード大会の前身である国際学生大会に派遣されましたが、欧州の戦火が激しくなってきたために、無念の帰国をされた先輩もおられました。その先輩は棒高跳で日本インカレ優勝、また自己記録がその年の世界ランキング 10 位と陸上競技部として、最も高い世界レベルにあった方なので、国際学生大会で活躍されたであろうと考えると残念でたまりません。

第 2 次世界大戦に敗戦し、物資不足で本来ならば関東の大学に進学するような選手が関学に入学。1947 年から 3 年連続で関西インカレ総合優勝するという好結果を残したこともありました。なお、当時部員として活躍し、2015 年 11 月に逝去された OB 会の名誉会長も優勝メンバーの一員でしたが、関学に入学する前には兵隊として仙台に赴任。多くの同僚を戦争で無くし生きる意欲を失くして大阪に戻り、関西学院に入学。キリスト教に出会い、チャペルや授業でその教えを学び、どれだけ癒されたことかという事を奥様から伺うことができ、関学の建学の精神が学生や同窓に大きな影響を与えていることを改めて認識いたしました。

昭和 20 年代からリレー種目で日本選手権や日本インカレで優勝する等の活躍をしておりましたが、本格的に「短距離の関学」という時代が到来したのは 1960 年 ~1965 年であり、2020 年に東京で二度目の五輪が開催されますが、1964 年の東京五輪の前年には関学が単独チームで日本選抜に勝利し日本記録を樹立。単独チームを日本代表として選考するかどうか話題になったこともありました。

大学紛争で体育会のどの部も低迷を余儀なくされますが、陸上競技部も部員総数がわずか 10 名あまりの時代が数年続くという時期があり、とうとう 1981 年には創部初の関

西インカレ2部降格という経験をしました。その低迷期に監督をOB会から指名され、2016年3月の退職まで陸上競技部の監督として最長の期間となる32年間、紆余曲折を経ながら、全うできるとはその当時想像もできませんでした。1986年に民間企業から職員として関学に入職。仕事と部活指導を何とか両立しながら、多様な学生をうけいれる入試制度が徐々に導入され､陸上競技部はそれらの入試制度で優秀な選手を獲得する事ができ、世界陸上やユニバーシアード等世界に羽ばたく選手を輩出し、またチームとしては1999年に33年ぶりに二度とOBから優勝できないと言われていた関西インカレで7度目の総合優勝を達成。2008年と2011年から2015年まで5年連続で総合優勝するという関西の男子校としてはNo.1チームにまで到達することができました。また、指定強化クラブ制度が体育会の数部に導入され、1度目に採用になった際には、コーチを招聘して出雲駅伝や全日本大学駅伝といった全日本クラスの大会への出場を目指しましたが、達成できなかったため、2度目の申請では不採用。3度目の募集が始まる前年から外部コーチをOB会の支援のもとに招聘し､19年ぶりに両駅伝に出場を果たし､指定強化クラブに返り咲き、その後は両駅伝に連続して出場し、駅伝では新興勢力ですが、京都産業大学や立命館大学といった伝統あるチームに肩を並べるまで至るようになりました。特に2014年の丹後駅伝（関西学生駅伝）ではわずか1秒差で両大学にゴール前でかわされましたが､｢関西3強｣と言われるまでに成長してきており、近い将来まだ一度も成し遂げていない関西学生駅伝で優勝を果たしてくれるものと確信しています。

２．監督に復帰してから学生とともに歩み、行動したこと

上ケ原キャンパスに人間福祉学部、国際学部、聖和キャンパスに教育学部が設置された頃から急激に部員数が増え始めました。その当時は総監督として部の面倒は見ておりましたが、現場を見る監督は学外で働く卒業生に委ねておりました。学外監督なので部員数増もあり部員全員に対する指導ができない状況となり、また幹部部員との意思疎通がうまく図れなくなってきたため、2010年から再度、監督に復帰いたしました。監督に戻るにあたり、私から学生主体のチームづくりをするために、様々な要望を部員に依頼しました。陸上競技は個人競技ですが、関西インカレ等の対校戦は部員全員で戦っていかないと勝てないという事を総監督になる前に監督していた時に経験したからです。

監督復帰時には部員数が150名を上回っていました。関西インカレ等大きな大会に出場できる人数は限られてきます。試合にでる事ができない部員をいかにチームの中で戦力として有効に、また当該部員がやる気をもって部活動を継続するようにさせていくかが、監督として特に気を使いました。まず部員一人ひとりと意志疎通を図るにはどうしたらいいかを考えました。スポーツ文化課より当時スポーツ選抜入試で入学してきた部員の学業成績が総じて芳しくないので、監督としてできる限りフォローするように依頼があった際に、彼らだけでなく部員全員に対して公平感を持たせるためにPCのメールにて春、秋各学期の成績や部員の近況を報告してもらうようにいたしました。最初は部員もメールで依頼した内容を単に報告するだけでしたが、部員一人ひとりに対して送信してきた内容に関してメールを返信しました。150名全員に送信するとなると大変な事です。昼の休憩時間

や仕事が終わってから等でコメントを考え返信しますが、一度に多くの部員から送信されてきた際には、長く返信しないと放置されていると相手方の部員の心象が悪くなると思い、できる限り同日に返信するようにしました。肩こりで疲れたことが多々ありましたが、最初の頃は私が返信してもほとんど何のアクションもありませんでしたが、だんだんと彼らから「有難うございました」「また、何かあれば相談しますのでよろしくお願いします」「就職の事で悩んでいますので相談にのってください」等の返信が返ってくるようになってきました。報告・連絡・相談が徐々にですが、できるようになり部員との意志疎通もかなり浸透する事ができました。

PDCA を回す事にも注意を払うようにしました。毎年、幹部には部の目標を、陸上競技にはいろいろな種目がありますので、それぞれのパートにはパートの目標を、そして各人には自分自身の目標をたててもらい、達成した場合には新たな目標を、できなかった場合には、何故できなかったかの振り返りを行ってもらい、次年度につなげるようにしました。それを私が一覧表にして部員全員に配布し、各人に共有することで誰がどのような目標をたて、どのような結果に終わったかを知ってもらうようにしました。これもチームとして戦うために必要と考えたからです。

関西インカレ等の対校戦では、幹部学年を中心に試合に出場しない部員で組織的な応援ができるように自分たちで考えてもらい、試合前に関学の応援歌を歌って士気を上げたり、いろいろな曲を応援歌風に編曲して選手に風を送ったりもしてもらいました。2011 年の連覇が始まった時から行っていますが、当時試合に応援に来られていた京大のかなり年配の OB が「ぼんぼん学校の関学がなんであんなにまとまった応援ができるんだ」と京大の学生に言われているのを関学の先輩から伺ったこともありました。総合優勝して記念写真を撮った際には、選手だけでなく裏方で頑張ってくれた部員も同じように喜んでいた顔を覚えております。

早稲田大学競走部が入部式をしている事を HP で知り、2012 年度入学生から 4 月下旬に入部式を行うようにしました。部長、OB 会長や主将、また監督から「関西学院大学陸上競技部」とはどのような部であるかという意識づけを行っています。まだ入学して 1 カ月も経たない時にしますので、新入生の中には多くの先輩部員が見ている前で自己紹介をしますので、緊張して上手にできない学生もいますが、終わってから新入生全員で記念撮影した際の笑顔を見た時には陸上競技部の部員の一員になれたという満足感や自覚を感じることができているように思え、入部式を始めて良かったと思っています。2016 年 4 月には新たにまた新入生を迎えますが、部長から私の後任の新監督には引き続き行ってほしいとの要望が出ていますので、長く続けて伝統行事にしてほしいと思っています。

新入生については入部の際に「入部誓約書」なるものを提出してもらっています。法的な拘束力はないですが、陸上競技部には学生で決めた部則があり、部員としてその部則を遵守する事や年々 SNS を使ったトラブルが増えてきている中で、部員になる限りは SNS により部員同士でトラブルを起こさない、他者へ迷惑をかけない事、部員であるよりもまず学生であるので学業との両立に心がけるといった事を内容として記載しており、内容を確認してもらった上で、新入生から誓約書を提出してもらっています。

学生にとって一番の心配事は大学を卒業してからの進路です。それも上記に記載しておりますが、4年生になる際には必ず今後の進路について学業成績報告等と一緒に今進路についてどのように考えているか、また実際どの程度の活動を行っているか等についても報告してもらうようにしました。関学は全国の大学でもトップクラスの就職率を有する学校ですが、リーマンショック以降は企業の採用者数も減り、多くの部員を抱えていたため、彼らの就職がうまくいくように支援することにも配慮しました。陸上競技は野球やサッカーのようなプロ制度はありません。唯一、駅伝をやっている実業団チームへ選手を就職させることぐらいしかできませんので、多くの部員は民間企業、公務員、教員として就職します。そのため、キャリアセンターの職員の方々の協力を得て、本人が可能な限り希望する企業や業界に就職できるようにアドバイスを中心にサポートをしてきました。「ゆりかごから墓場」までという言葉がありますが、監督として預かった限りは部員がどんな選手であれ、最後まで陸上競技部に所属し、頑張ってくれた者には相談があれば可能な限りのフォローはして参りました。

3．32年間の監督人生を振り返って

私は名選手ではありませんでした。名選手＝名監督ではないという言葉がありますが、学生時代に怪我をして一時は退部も考えた人間ですが、低迷時期に部員として所属しており、人数も少なく誰も裏方をする部員がいませんでしたので、先輩方からの依頼でなんとなく主務や学連の仕事に就きました。怪我をしていた際には部活も休部しており籍を置いていただけでしたが、役職について体育会本部や学連に行くようになってから、自分の役割の大切さを知り、社会人になる前にこのような経験ができた事は本当に自分の人生に大きな糧となりました。

2015年には関西学連の役員を長きにわたりしていましたので、関学の関係者としては第2次世界大戦前に卒業された方々以降誰も表彰されていない日本学生競技連合から6人目となる「功労賞」をいただく事ができました。これも部員や卒業生の方々の協力や支援がなければ実現は無かったと思っています。

最後に学生指導に関するメッセージを申し上げておこうと思います。私は大学でスポーツをする学生には何パターンか選手が分けられると思います。特にスポーツ選抜で入学してくる部員の中には高校の先生の言われる通りに今までやってきたので、自分で考える力がない者もいます。そういった選手は関学では選手を管理するような指導をしていませんので、多くの部員は高校時代の結果を上回って卒業する者は少ないです。私の部員に対する基本な姿勢は部員をレールの上に乗せて脱線しないように心掛け、それ以外は自分で考えるようにしてもらい、困った時に相談にのるというものです。結果的には試行錯誤をしながらも自分で考え行動し、その壁を乗り越えた者が世界に羽ばたいたり、全日本レベルの試合で結果を出したり、ここ一番で結果をださないとチームが勝てないという際に実力を発揮してくれました。今後もこのような選手が関学の陸上競技部に入部してくれる事を望みますし、また新監督を中心に新しい体制になりますが、私の経験をもとに側面から引き続きサポートをしていきたいと考えています。

私は 2020 年に東京で開催される五輪にむけ関西から代表選手を一人でも多く輩出したいと考え、関西学連でその関係の仕事をすることにしました。体育会および体育会同窓倶楽部（KGAA）の今後ますますのご発展を祈念して本講座のご報告といたします。

（写真提供『関学スポーツ』）

（写真提供『関学スポーツ』）